

教示を頂いた同所の宮本方正氏に御礼を申し上げる。(北海道大学水産学部)

### Summary

A Formosan useful alga called Hai-mô-yu or Hai-mô-loo was proved by examining a sample to be identical with *Sarcodia ceylanica* HARV. A brief morphological description of the sample based on the writer's observation is given.

### 引用文献

- OKAMURA, K. (1921): *Icones of Japanese algae* IV.  
 (1936): *Nippon Kaisô-shi*.  
 YAMADA, Y. (1938): *Notes on some Japanese algae* VIII.

## ウミトラノオの薬効

中沢 信 午

S. NAKAZAWA: *Sargassum Thunbergii*  
 as a medicinal plant.

1948年の4月から9月まで私は浅虫の臨海実験所でのんびりと海を眺めて過したが、この間におこつた唯一つの忘れがたい事件がここに紹介する虎の尾さわぎである。

ちょうど5月10日、県庁・役場・会社など立派な人たちがそろつて浅虫へ集り、小学校を会場に海藻の講演や採集の指導などを行い、「海の虎の尾をとりましょう」と宣伝してサッと引きあげていつた。それには次のようなわけがある。

もと京城大学医学部におられた杉原德行博士および望月学博士はウミトラノオ (*Sargassum Thunbergii*) の浸出液がマクニンにおとらぬ蛔虫駆除効果をもっていることを見出し、これにもとづいて植村製薬会社がこの海藻からパンシー (Pansea) という錠剤をつくつて売り出した。杉原博士は戦後日本国内ではサントニンもマクニンも不足している事情から、パンシー製造に応援され、一方では青森県の海岸にウミトラノオがたくさんあるというので採集に努力されたわけである。

杉原・望月両博士のパンフレット「蛔虫及び蛔虫駆除に就いて」(1948)はその日会場内で配布されたが、それによるとウミトラノオは古くから朝鮮

の民間で駆虫薬として用いられ、博士自身マウス、家兎、猫、豚などの動物実験について臨床実験を行なつた結果、たしかに著しい薬効を見出したという。例えば京城都心地の清溪小学校、郊外の清涼および舞雀両小学校の児童3535名中で検便によつて蛔虫卵陽性のもの2415名あり、清涼校にはマクニン、他の二校にはパンシーを服用せしめ、1週間にわたつて検便したところ、排虫率はパンシー78%、マクニン64%の良成績を得た。なおパンシーの有効成分は不明であるが薬効はすばらしいこと、但し効力は海藻の採集期によつて異なるらしいから此の後の研究を要することがのべられてある。

パンシーがどういふメカニズムで効果をあらわすかは不明であるが、これを豚の蛔虫にあたえるとはじめは興奮を示し、のちに麻ひして死ぬ。これはサントニンの作用と類似しているという。またマウスに皮下注射すると歩行困難となり死んでしまう。兎でも同様であつた。その他の動物実験もパンフレットにのべられている。

さてその日、サントニンに代る新薬の原料が浅虫附近で無尽蔵にとれるというので大さわぎとなつた。うまくやるとひともうけ出来るという人々も集つてきたし、小学生を動員して採集しようと青森県庁ものり出した。県庁で配布した採集実施要綱をみると、採集時日は5月1日～6月30日の間、採取目標は乾燥量が3万貫、採集者は小学校児童その他、買上げ価格は1貫当り15円、採集経費は一切県で負担するとなつてゐるから、いかに県庁でも力をいれたかがわかる。

それで私の如き青二才までが浅虫における唯一の海藻学者だとかで引っぱり出されて講演をやらせられたし、夜は役人たちが集り採集の前祝いで大いにドンチャンさわぎをやつたという話である。

私がひそかに心配したことがあつた。それはウミトラノオの放卵期が7～8月なのに目標3万貫の採集がさきに記したように5～6月だということである。あんまり採ると無くなつてしまふ、と私は心配した。しかし私の考えは違つていた。第一に人間がとりあつめる海藻の量などは多いといつても少ないもので、自然はそんなことにビクともせず、相変らず岩肌が遠目に焦げてみえるほどのウミトラノオはその翌年にまた茂つてきた。もう一つは、数年のうちに国内には再び得体のしれぬパンシーにとつて代つて化学的に純なサントニンや種々の合成薬品が、より薬効あるものとして現われてきて、今ではもうウミトラノオをかえりみる人もなくなつた。

さてしかし、あの日パツと咲いて散つていつた、あの虎の尾さわぎは、果してその真相は何であろうか。はたしてウミトラノオにはどれだけの駆虫作用があるのだろうか。その有効成分は何だろうか。どういうメカニズムで作用するのだろうか。これらの問題はサントニンがあるなしにかかわらずもう一度研究されるべきものであろう。

(山形大学文理学部)

### Résumé

It is said that *Sargassum Thunbergii* has a vermifugal effect upon ascarids. In 1948, a drug named "Pansea" was manufactured by a certain pharmaceutical company from the extract of this alga. The effective component, however, does not seem to be clarified yet.

## シマソゾ (*Laurencia amabilis* YAMADA) の新産地

山田 幸男

シマソゾは去る昭和27年7月並びに28年5月八丈島八重根及び洞輪沢に於いて干満線間の岩礁上で筆者等に依つて採取され、精検の結果新種として Rec. of oceanogr. works in Jap. new Ser. Vol. 1, no. 1, p. 113. に記載発表されたものであつて、今迄上記の場所から知られていただけであつた。然るに最近本会々員野村義弘氏が本年6月24日愛媛県西宇和郡伊方町川永田室ノ鼻に於いて採り、種の同定の為筆者の手許に送り来された乾燥標本は明かに本種と思われる。本種の体の表皮層は、長く伸びて横に並び丁度柵状組織の様になつている。この様な特徴は本邦附近産のソゾ属では余り多くなくクロソゾ (*L. intermedia* YAM.), パピラソゾ (*L. papillosa* GREV.), タカサゴソゾ (*L. palisada* YAM.) と本種のみ位であつて何れも Palisadae という Section に入れられる。標本は3枚あるが内1枚のは八丈島産のものと体の太さも似て比較的繊細であるが、他の2枚はそれよりも太く稍ミツデソゾ (*L. Okamurai* YAM.) に似た外形を呈するが四分孢子、嚢果共疣状の末端小枝上に生ずる点がミツデソゾの夫れとは一寸ちがう。無論体の構造をしらべれば上述の表皮層の様子で直ちに区別はつく。尚、シマソゾの体細胞膜上には半月形の肥厚部は見られない。大体今迄見た処では表皮細胞が柵状に並ぶものにはミツデソゾ其他に見られる半月形の肥厚部は見られないので、この点は面白